

芦高二十年史発刊に際して

学校長 前 川 誠 一

凡そ生物の発達成長は各機能が同じ速度で平等に発達するものではない。ある時期にはある機能が発達し、次に他の機能が伸張する。従ってこの発達の特徴を捕えて幾つかの発達段階に区分することが出来るのである。

学校は一個の生物ではない。然し学校は単なる校地、校舎のみからなるものでなく教師、生徒、父兄、卒業生等が学校の重要な構成分子とすれば、学校も亦一個の生物とも見られよう。かく考えれば学校の発達変遷もその活動の特質に依じて発達段階に区分し得る筈である。教育見地に立つて学校史を考察する時、かかる研究は非常に重要であるが、一般には学校史を区分する場合五年乃至十年の期間を画して行なうのが普通である。私たちは本校創立約二十年を以って一段階とし、過去をふりかえり、歩みの跡を反省し、本校関係の方々からの御厚意の数々を永く記念し、かねて私達が微力ながらも本校発展に寄与し得たさやかな努力のあとをとどめ、併せて本校の弥栄を祈念せんとするものである。

本校は昭和三十一年創立十五周年記念式典を盛大に挙行し、「芦高十五年史」を刊行して我々後につづく者に本校のよつて来たるところを明らかにしたのである。あの時より既に五カ年有余、テンポの早い世の移り変りと共にこの間本校も亦大きく発展したことを想えば、この五カ年余も決して短いものではない。主としてこの五年余の歩みを取録し、更に五カ年の発展の基盤をなすそれ以前にも遡及して「芦高十五年史」の補遺もかねたいというのが今回の私達の願いである。

昭和十五年、一九四〇年創立の本校は本年まさに二十周年に当る。厳密に言えば二十二年史とも言うべきであるかも知れぬ。二十年史は一昨年にも刊行すべきであった。然しながら当時から懸案の諸施設の落成を待つて、これを含めてと考えるとため延期していたのであるが、現在これら施設の竣工を目前に控えてはいるものの、更にこれ以上延ばすことは二十年史の意義を失うことを虞れて、ここに思い切つて本史を刊行する運びに至つたのである。

思うに一校の発展隆盛は一朝一夕に起るものではない。学校当事者は勿論、生徒一人一人の日々の努力、設置者たる県当局、父兄、卒業生、更には地域社会の方々、即ち芦屋市当局並びに芦屋市民各位の直接間接の厚意ある御支援と御指導が積り重なつて結果するものであることは言を俟たない。十五年史には僅々十五年をもつて驚異の発展を遂げたことを何人も心から慶祝して下さつたのであるが、それから五年有余の歳月は、教育施設の整備についても、生徒の勉学状態に於ても一段と飛躍をいたしておると信するのである。名門芦高として全国的にその校名を謳われ、名声噴々たるものがあることは決して誇張でも己惚れでもないと思う。世評は時に本質を見誤ることもあるが、案外正直なものであることを思えばこの名聲はまことに喜ばしいことである。これ全く平素本校の教育に寄せられる関係各位の御懇情と御指導御鞭撻の結果に外ならないのであって、茲に謹んで衷心より深甚な感謝と敬意を捧げるものである。

今や本校は創立二十有余年の年を迎え施設の整備拡充と教育の刷新によつて一大飛躍を展開せんといたしておるのである。先輩が築かれた自由自治のうるわしい校風は愈々深く伝統の中に根を張り、脈々として相つぎ相伝えて生徒各自の胸中に美しい花を咲かせている。教育の内容はもとより時代の進運社会の変遷によつて変化してゆくものであろう。然し乍ら自由自治の精神こそは教育の本質であつてその目標は一貫して不変である。透徹した知性と決断力、節操を持していやくも軽挙行動することなく、常に敬愛の心をもつて師友に接すること、即ち明決、操守、敬愛の三項目は蓋し自由自治の核心をなすものと思う。私達はこの美しい伝統の上に、更に一段と優美な校風を樹立して先輩の努力に報い、世人の期待に沿うと共に後につづくものに無形の至宝を残しておき度いと思う。

私達は幸いにも創立二十周年の記念すべき好運に際会し感激措く能はず、ここに拙文を草して重ねて関係各位に感謝すると共に本校の発展を祈念してやまないものである。